Vol.38

比較文化学科通信

発行：関東学院大学国際文化学部比較文化学科　〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1 TEL.045（786）7056

巻頭言

「橄欖」と「柘榴」

比較文化学科長　髙井　啓介

さてみなさん、今回の巻頭言のタイトルは、二文字ずつの漢字の組み合わせからなる「橄欖」と「柘榴」です。さてさて、この二つのことば、なんと読むかみなさんご存知だったでしょうか。ヒントをいくつか出しましょう。よく見てみると、すべての漢字（橄も欖も柘も榴も）が木へん（きへん）の漢字ですから、なにかの木を指しているに違いありません。もう一つ、どちらも関東学院と関係することば、そして柘榴のほうは３号館ともつながりが深いことばです。わかったかな。

さて、それでは少しずつ種明かしを。「橄欖」は、「かんらん」と読みます。「柘榴」は「ざくろ」と読みます。「ざくろ」のほうはこれ以上の説明がいらないかもしれませんね。真っ赤な大き目の実をつける果樹で、３号館の１階にこの名前のついた食堂があります。ザクロで食べたことがあるみなさんは多いと思いますが、ザクロを食べたことがあるみなさんはどれくらいるのでしょう。日本のスーパーではあまりザクロを見かけませんね。私がアメリカに留学していたときは、スーパーでザクロを買うことができたので、買って食べるのが好きでした。実を二つに割ると、赤い粒粒がたくさん入っていて、一粒ずつ食べるのは大変ではあるのですが、その甘酸っぱさが大好きでした。一方の、「かんらん」ですがこれだけではわからないと思います。「かんらん」はオリーブのことです。正確にいうと、オリーブが誤って橄欖という漢字で伝えられています。オリーブが漢字になったときになぜ「橄欖」になってしまったのかはみなさん調べてみてください。いずれにしても、ペルシア地方原産のこの果樹は、日本にも伝わり、関東学院大学の校章になりました。校章の由来については、大学のホームページに次のような説明がありました。『関東学院大学の校章は、オリーブの三葉に由来します。旧約聖書中の有名な「ノアの方舟」の物語の中で平和と繁栄を象徴するものとされています（創世記８章11節）。一つに結ばれた三つの葉は三位一体なる神をしめすとともに教育理想である三育すなわち知育、徳育、体育を表します。そして、三葉にいだかれ育まれる新芽は、関東学院大学に集う若人を表しています。』

ザクロも聖書のなかにたびたび登場します。その果実が多くの粒を持つことから、豊穣と生命の象徴とされます。エルサレムにあった神殿にはザクロの意匠が凝らされ、大祭司の衣服にもザクロの飾りが付けられていたといいます。なぜ３号館の１階の食堂の名前がザクロになったかについては、食堂のドアにその由来が書かれているので見てみてくださいね。

さて、オリーブとザクロ。みなさんのことです。関東学院大学の３号館で勉強するみなさんは、この二つの植物のことを時々思ってください。日々の学びを通して、知・徳・体を鍛えていってください。いまは社会にはばたく準備をするときです。そして社会に出たそのときには、関東学院のスピリット、「人になれ 奉仕せよ」の精神を忘れずに、仕事を通して生命を充実させ、豊かな実を結んでいっていただきたいと思います。

ゼミ紹介（西尾ゼミ）

ゼミ連

昨年の秋学期から２年生がゼミに所属して半年が経ち、だいぶゼミ活動にも慣れてきたと思います。皆さんは自分が所属するゼミ以外がどんな活動をしているか知っていますか？

今回は「日本文化・歴史」が主な研究テーマである西尾ゼミについて担当の西尾先生から紹介していただきました。

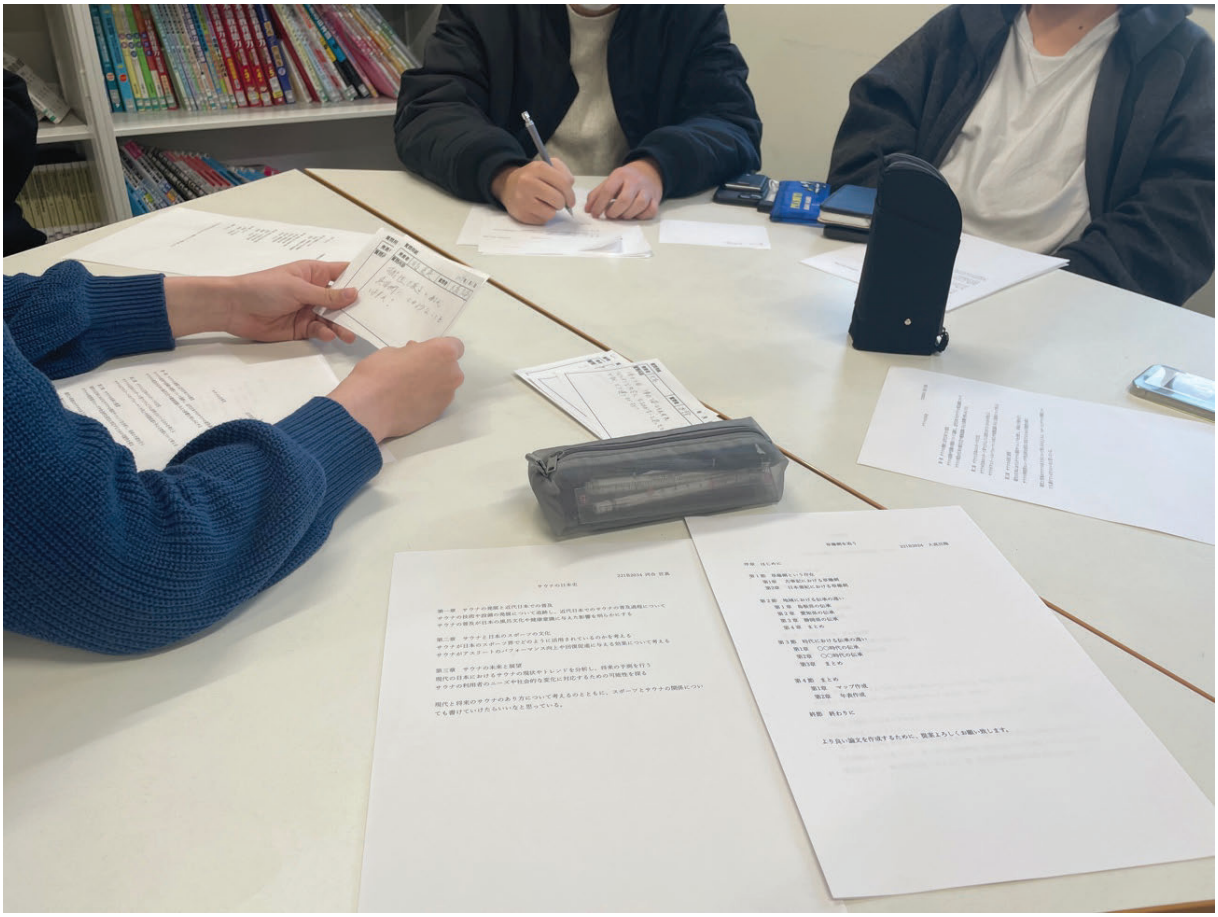
３年生の討論の様子

＜西尾先生コメント＞

西尾ゼミは、２年生14名、３年生14名（１名留学中）、４年生14名が在籍しています。２年生は共同研究として、江戸時代における六浦地域の景観復元に取り組んでいます。具体的には江戸時代の地誌である『新編武蔵風土記稿』を読んだ上で、江戸時代に描かれた情景と突き合せることで江戸時代の景観を想像する、という作業を進めています。江戸時代の文献や絵画史料を読み込むのは大変ですが、次第に慣れていけばよいかと考えています。

３年生になるとそれぞれのテーマに沿って卒業論文の構想を練っていく作業を進めていきます。具体的には、ゼミのメンバーそれぞれが卒業論文のテーマに関わる文献を整理したり、卒業論文の章立てを提示したりする発表を行います。そして、発表が終わると２つのグループに分かれて

発表に関する討論をします。討論のなかでは、司会・書記などもゼミメンバーが交代で担当し、全員がゼミに参加する形となっています。４年生はすでに12月に卒業論文を提出しましたが、提出前には個別指導で卒業論文の内容や書式などを細部にいたるまで検討しました。当初は書けるかどうか不安を漏らしていた学生もいましたが、11月・12月に追い込みをかけて多くの学生が提出できました。あまりレクリエーションはないゼミなんですが、コロナも明けたことですし今後はもう少しそうした点も考えていこうと思っています。



発表者は各自でレジュメを用意し、生徒が中心になって討論会を進めます

西尾知己先生プロフィール

■**氏名**：西尾 知己（ニシオ トモミ）
■**所属**：国際文化学部比較文化学科
■**担当科目**：文化史論１、日本研究入門、日本文化史、日本史１・２
基礎ゼミナール、ゼミナール１・２・３・４
■**専門分野**：日本中世史、寺院史
■**最終学歴**：早稲田大学大学院文学研究科史学（日本史）
専攻博士後期課程修了 博士（文学）
■**研究テーマ**：中世後期顕密寺院の研究
中世後期東寺・東大寺寺院組織の研究

ゼミナール連合　諸課程履修者インタビュー

ゼミ連

比較文化学科は日本語教員や司書など様々な資格が取得できます。今回はその中でも「諸課程」と呼ばれる卒業時に資格を取得するため、専門的な授業を受講する課程を履修している３年生の学生達にインタビューをし、諸課程の紹介をしてもらいました。

＜質問内容＞

１．どういった課程なのか（取得できる資格など）
２．なぜ履修しようと思ったのか
３．主な授業
４．やりがい・大変なこと

学芸員

１

学芸員課程は博物館や美術館の展示や運営を行う専門的職員の資格を取得するための課程です。学芸員は文部科学省が管轄する国家資格の１つで、定められた授業を履修することで卒業時に資格を修得することができます。

２

履修しようと思ったきっかけは興味を持ったからです。学芸員の授業を通じて博物館への知識が深まり、実際に博物館や美術館へと訪れた際に多面的な視点で見られるようになりました。

３

・博物館展示論（実際に美術館などに訪れて展示について学ぶ授業）
・情報メディア論（ポスター制作）

４

大変なところは諸課程なので他の生徒より履修する授業数が増えるところです。しかし学芸員課程の授業はどれも楽しいものばかりです。やりがいは、複数の実習があるので座学で学んだ知識をアウトプットすることができるので自分の身になっていると感じるところです。

日本語教員

１

日本語教員は日本語を母語としない外国人に対して、日本語を教える教員です。この課程では教員になるために必要な知識や技術を習得できます。教職課程などの諸課程とは異なり、正式な免許の取得ではないものの、課程を修了すると修了書が授与されます。

２

日本語を教えることを通して、様々な国の人と交流することができます。また、日本語を教える

ことができるという点は、日本国内だけでなく海外でも自分の強みにできるのではないかと感じたからです。

3

・社会言語学、対照言語学（日本語の活用や発音の種類、時代や社会の変化と共に移り変わる言葉の種類や意味など、日本語を言語として捉えるための授業）
・言語理解の過程、日本語教員実習（日本語教育に使用する教材の分析や、授業の組み方、教育実習を行う授業）

4

私たちは日本語を母語として習得しているので、今まで意識してこなかった活用の種類やアクセント、使用している日本語のレベルに注意しながら教える際の日本語を選択する必要がある点が難しいと感じます。しかし、今までよりも日本語や日本文化についてより深く知ることができる点や日本語で外国人と交流することができる点にやりがいを感じます。

教職（社会科・地歴公民科）

1

比較文化学科の教職課程では中学校の社会科と高校の地歴・公民科の教員免許が取得できます。他にも経済学部と社会学部にも同じ科目の教職課程があるので授業が同じになることが多く学部を越えて友達が作りやすい諸課程だと思います。

2

もともと教職に興味があって教員を目指すために履修を決めた学生もいれば、安定した職に就きたい学生や教員免許が欲しくて教職課程を履修している学生もいます。目的は違っていても免許取得を目標にしていることは変わらないのでお互い協力しながら履修しています。

3

・教科教育法、道徳教育の理論と実践など（各教科の模擬授業を行う授業）
・教育原理、教育の方法と技術（教育学の歴史や教育法に関する知識を学ぶ授業）

4

教職はとにかく忙しくて正直とても大変です。それでも、学校の先生になりたいと強く思っている人や４年生に全員が行う教育実習にむけてみんなが頑張るので、１人じゃなくみんなで協力しながら授業に取り組むことができるので心強いです。先生方も親身になって相談に乗ってくださるので不安なことがあったらすぐに相談できる環境だと思います。大変な分やりがいは強く感じるので今はがむしゃらに頑張ろうと思います。

ゼミナール連合学生企画

３年　浅野　裕太

写真撮影：３年 浅野裕太

2023年度ゼミナール連合の学生企画では、例年の学生企画とは違い外との繋がりを作るために柏崎先生の協力のもと、横須賀市との連携企画を打ち出しました。企画では戦争の悲惨さについて学ぶだけでなく、我々若い世代が戦争について考え少しでも多くの人に伝えることを目的として、横須賀と関東学院大学ならではのオリジナルのツアーを作成しました。オリジナルツアーの作成前にゼミナール連合に参加している学生は、フィールドワークを行いどのように企画を作成していくかチームごとに試行錯誤を重ねていきました。提案会をする前にブラッシュアップを行い直した方が良い部分や加えた方がいい情報など共有しました。提案会当日、完成品を横須賀市に提案し高評価と共にプラスαで何を付け加えた方が良いかアドバイスをいただきました。今回の企画全体及び学生企画リーダーを通して、例年の学生企画とは違い横須賀市との連携企画を０から考案し、観光ツアー企画を提案したことに達成感と企画を練る楽しさを感じることが出来ました。始めはリーダーとしてゼロから企画案を出すことが出来るか、また実際連携するにあたってどのように進めていくか悩みながら進めていきました。しかし、多くの失敗もある中先生方や本企画に参加してくれた学生に助けられたことは一つの希望にもなり学びにも繋がりました。チームワークの大切さや計画性など、社会人において重要な力を身に着けると共に貴重な経験が出来たのではないかと思います。

写真撮影：本学科教員　呉世蓮

ワールドスタディー・アメリカ

４年　本多　歩

私は、自分の目でアメリカを見てみたいとの思いから、ワールドスタディーに参加しました。高校時代にオーストラリアにホームステイしたことがあるのですが、その時、実際に現地を訪れ、自分の眼、肌で見て感じる事が、その国の文化や生活を学ぶのに１番の近道だと感じました。その後、大学に入学し、授業を通してアメリカのことを学ぶなかで、この国の文化や生活、街並みを自分の眼で見たいという思いが強くなりました。

今回のワールドスタディーのテーマの一つは、アメリカの歴史を記念碑にして記憶する文化について学ぶことでした。夏の集中講義では、どのような歴史を踏まえて記念碑が作られたのか、作られた後の記念碑が今までにどのような歴史を歩んできたのか、その記念碑は人々にとって何を象徴するものなのかなど、アメリカで実際に見に行く予定の記念碑について学びを深めました。また、比較対象として、金沢八景や横須賀など、大学の周辺にある記念碑についても学び、実物を見学しました。

アメリカに着いてからはワシントンとニューヨークに行きました。ワシントンではホワイトハウス、連邦議会やリンカーン記念堂などを見学しました。連邦議会には歴代の大統領の銅像があり、建物の中には彫刻や絵画がありました。ワシントンの公園には戦争を記憶する銅像が数多くありました。その中でも集中講義で事前に学習していた、硫黄島の戦いのワンシーンを切り取った銅像を見た時は、実物が大きく驚き、感動しました。ニューヨークではタイムズスクエアを散策し、移民労働者の住んでいたテネメント博物館を見学しました。ワシントン、ニューヨークともに自ら観光では行かなそうなスポットを見ることができて、いい経験になりました。また、今回引率をしてくださった小滝先生はアメリカについて研究している先生なので、移動時間などに街中で目につき、疑問に思ったことをすぐに質問でき、解説してもらえるというのが個人的に楽しく、ワールドスタディーならではの体験だと思います。

参加する前はあくまで授業なので真面目なことばかりやるのだろうと思っていたのですが、実際に参加して、一緒に行ったメンバーでお揃いのＴシャツを買って着たり、朝にスターバックスに行ったりと授業の範囲内で自分たちがアメリカでしてみたい事、行ってみたい場所に行かせて頂きました。一生に一度の経験ができたと感じています。

ワールドスタディ・韓国

２年　町野歩乃果・渡邉寿々佳

私たちは学生６名、引率の先生１名、計７名で韓国に４泊５日で行ってきました。８月のはじめに集中講義を受け、その集中講義の中で５日間の日程を全て学生６人で考え、先生の助言も受けながら計画を立てました。ソウル市内と光州を回り、５日間で韓国の文化に多く触れ、現地の方と交流しながら楽しく韓国のことについて学びながら過ごしました。

～明洞～　～ソウルタワー～

１日目は明洞の雰囲気を楽しみながら多くの時間をここで過ごしました。店が多く並んでおり、海外からきた観光客で賑わっていました。ここではショッピングもしたので韓国語を使う機会が多かったです。

１日目の夜はケーブルカーを使ってソウルタワーに登ってきました。上に登ると観光客や遠足で来た子供たちでとても賑わっていて多くの人がソウルの景色を楽しんでいました。ソウル市内を上から一望する機会など滅多にないので、貴重な経験ができましたし、街の光がとても綺麗でした。

～キョンヒ大学～

２日目はキョンヒ大学を訪れて学内を見学させてもらいました。韓国ドラマや映画の撮影地としても使われており、白を基調とした外観がとても綺麗でした。日本の大学の何倍も学内が広く、スクーターを使って移動している学生もいました。キョンヒ大学の先生方に学内を案内してもらい、院長先生とも挨拶できる機会を頂きました。

～景福宮～　～漢江～　～弘大～

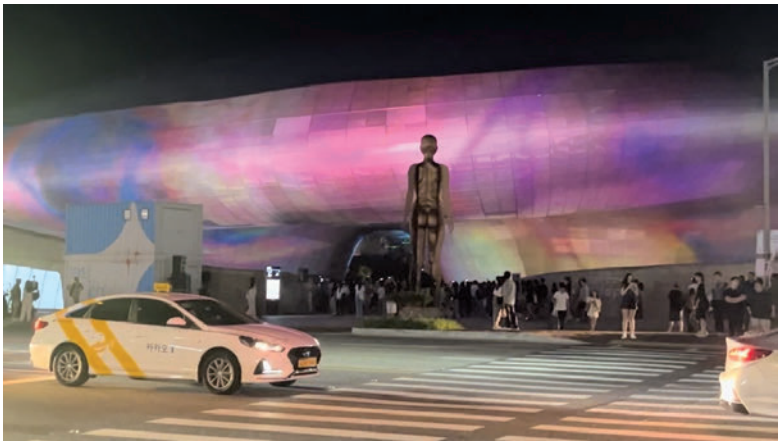
景福宮には全員で韓服を着て見てまわりました。建物の造りや構成が日本とはまた異なり、違った雰囲気を感じることができました。２日目の夜は漢江に行き、よく韓国ドラマなどで見るラーメン自動調理器で即席ラーメンを作って食べました。ここも多くの人で賑わっていました。漢江では韓国ドラマの世界に入ったような雰囲気が最も感じられました。弘大は日本でいう渋谷・原宿のような街で夜でも多くの人で賑わっていました。夜でも多くの店が開いており、私たちもそこでショッピングをしたり、MBTI おみくじという韓国特有の珍しいおみくじを引いてきました。

～光州～

３日目、４日目は光州で過ごしました。私達は集中講義で事前に光州民主化運動について学んでから光州に行きましたが、実際に体験した方から話を聞いたり、当時の銃弾の跡が残っている建物の見学、当時の人が書いた日記、海外の新聞、国立民主墓地などを回り、光州民主化運動の悲惨さを目で見てあらためて体感しました。１番印象的だったのは民主化運動資料館です。民主化運動資料館では、実際に民主化運動を間近に経験したガイドの方が一つ一つ丁寧に説明して下さり、資料の中には当時のものをそのまま残してあるものもありました。学生達もガイドの方のお話などに非常に胸が痛くなり涙ぐんだり、あまりの衝撃に言葉が出ない様子でした。後日、国立５・18民主墓地に赴き黙祷を捧げました。光州は引率してくださった呉先生の故郷でもあるため、夜は先生の御家族と一緒にご飯を食べることもできて、光州では貴重な経験が沢山できました。

～東大門～

ソウルに帰ってきてからは東大門に行きました。私たちが訪れた時期はファッションウィークが行われていたため、様々な国籍のモデルさんが写真を撮っていてそれを間近で見ることができました。



コロナ禍明け私たちが最初にワールドスタディに行き、不安もありましたが、この５日間で旅行では経験できないようなことを沢山経験することができました。韓国への関心となると、どうしても音楽やファッションなど歴史や社会とは離れたものになりますが、今回のワールドスタディを経て、日本と同様、現在の韓国が成り立っている裏には様々な犠牲があることを学び、自分の無知さと共に今後は歴史的な出来事にも目を向けて学びを深めていきたいと思いました。また、韓国文化にも多く触れ、ワールドスタディに参加して本当に良かったと思っています。私たちは韓国に行きましたが、ワールドスタディでは様々な国に行く機会があるため、是非自分が興味のある国の時に参加して頂きたいです。楽しい日々を送りながら勉強できて充実した時間を過ごせると思います！

集中講義「映画と神奈川・横浜」

本学科教員　碓井みちこ

集中講義「映画と神奈川・横浜」を、2023年12月25日～27日に開講しました。横浜を物語の舞台・ロケ地とした実写映画・テレビ作品を題材にして、教室での座学と横浜スタディ・ツアーで、横浜の街の歴史、映画史や映画表現の特徴について、体験的に学ぶ授業です。

今年度も昨年度と同様、『霧笛が俺を呼んでいる』（1960年）、『天国と地獄』（1963年）、そして『あぶない刑事』シリーズ（1986～2016年）を取り上げました。ツアーは今年度も中川洋先生に企画をお願いしました。

以下、受講生が寄せてくれたコメント（抜粋）を紹介します。

「今回の横浜ツアーで感じたのは、横浜市在住でありながら、横浜の魅力を全く知らなかったのだなということです。（中略）お昼の後の集合場所にもなった教会前は何度か行った事がある辺りの付近だったので、『霧笛が俺を呼んでいる』で映った当時の光景との違いには驚いた。映画内で見た時は、あの辺りだとは思いもしなかったので、その点でも驚いた。刑事さんと主人公が歩くシーンから見られる背景景色や『天国と地獄』の権藤邸付近の変化も含めて、横浜という地域が映画公開からの60年近くで如何に変わっているかを体感出来ました。（中略）私は今までに聖地巡礼というものをした事がありませんでしたが、今回の体験を経て、見た映像作品の登場人物達と同じ角度から、同じ光景を見ることの楽しさは想像以上で、キャラクター達の感情を近くで感じられるような経験が出来て、とても楽しく、良い学びになったと感じました。」（Aさん）

「事前の授業で横浜が舞台の映像作品を鑑賞した時に見た場所と、実際に行ってその場所を直接見たときとでは印象は変わったように感じた。映画やドラマなどで映像のメインとなっているのは役者であり、場所の描写を長々とすることは少ない。そのため映像作品のなかでは建物や地形のごく一部を短時間で見ることしかできない。しかし実際に足を運んで自分の目でそれらを見ると映像では見ることのできなかった様々な角度から時間をかけてみることができ、新しい発見をすることができた。」（Bさん）

また、大学進学を機に横浜に住み始めたという受講生からも興味深いコメントがありました。

「ツアーの前から講義で横浜の様々な撮影地の説明などがあったが、私は大学から横浜に住み始めたということもあり、うまくイメージがつかめないことが多かった。（中略）場所と場所の距離感なども実際に体験することで映画やドラマの時代と現代での生活の違いやその時代の雰囲気を想像することができ、自分が映画の世界から現代にタイムスリップしたような感覚を味わえた。」（Cさん）

映画・テレビの歴史に関心のある学生はもちろん、観光業界や映像業界、横浜に本社・支社がある会社で将来働きたい学生にも、当授業の履修をお勧めします。

「2023年度 中国語資格試験対策講座」のお知らせ

本学科教員　菅野　恵美

比較文化学科では、今年度も中国語資格試験「HSK」のための対策講座を行いました（2024年２月７日～13日、日曜祝日を除く５日間）。HSK は中国政府公認の資格であり、留学・就職活動に大変有利です。昨年度は全員が２級・３級に合格し、４級に合格した学生もいました。

講師は李維濤（リイトウ）先生です。以下、今年度の参加者の感想を紹介します。

講座の様子（2024/02/07撮影）

今回初めてこの講座を受けて、授業であまり理解出来ていなかったところや少し苦手意識があった文法などを復習し、短時間でしっかりと身につけることができたのが嬉しかったです。また、頻出単語をおさらいしてから過去問を解いたため、問題をスムーズに解くことができ、とても達成感を感じました。少人数だったので、先生の質問に気軽に答えたりしながら授業ができ、より理解を深められて楽しさを感じる講座でした。　**（１年　沖崎彩華）**

私は大学で２年間中国語を履修してきました。これまで学んだ中国語を就職活動に生かしたいと思っていたため、今回この講座に参加しました。最初はこれまで学んできた中国語の復習から始まるため、自分の苦手な点を知ることができました。そのため、自分が勉強すべき点を整理することができました。さらに、講座では自分に合わせた級のレベルに沿って、過去問を解くことができ、文法の整理や HSK で特に問題とされる点を教えていただけるので、今回挑戦してみてよかったと思います。　**（２年　瀬戸愛理奈）**

この講座は初めてだったのですが、とても学びの得られる講座で、普段の授業よりも中国語に多く触れることができました。１、２年で学んだ単語・文法を少し忘れていたところもあったので、思い出すことができました。また、過去問を解いてみて、リスニングは拼音と簡体字合わせて暗記していないと解けないということが分かりました。一方で読解は、何度も過去問を解いて自分の弱点を把握し、試験当日間違いを繰り返さないよう復習していきたいと思いました。

（２年　浦山ひなた）

2023年度集中講義「外から見た日本 2」について

本学科教員　呉　世蓮

比較文化学科の「外からみた日本」という集中講義が２月１日から６日の間に行われました。今回は、韓国の昌信（チャンシン）大学校の韓　炫精先生が来日し、授業を担当しました。先生は日本と韓国の教育史、幼児教育がご専門であり、様々な教育現場で大活躍されています。以下、学生の感想を紹介します。

「外から見た日本」の講義は私が思っていたよりも多面的なものでした。日本と韓国の食、芸術、文化を学んだり、比較をしました。本題ではないちょっとした会話の中で文化の違いを感じることもあり、改めて異文化を学ぶことに喜びを感じました。また色々な事例を様々な立場に立って考察したり、意見を共有したりもしました。これらを通して自分でも気がついていなかった自分の価値観を知ると同時に、知らぬ間に根付いていた固定概念に気が付きました。自分を客観的にみる良い機会になりました。　**（１年・茅野まりん）**

この講義がなければ普段あまり考えることができなかったテーマについて考えることができました。日本に住んでいる日本人の自分から見た日本だけではなく、韓　炫精先生のお話も含めて外から見た日本というものを知ることができたように感じます。また文化というのは人と人との関係だけに発生するものでなく人と環境の関係にも発生するというのが興味深かったです。他にも、多様性と統合性の調和に関して難しく考える必要はなく、身近なものでは教育現場で行われる生徒会や体育祭・文化祭があることがわかりました。

この講義はほんの入り口として、今後自分でも日本の見られ方やそれぞれの文化の関係等を調べるとともに考えていきたいと思います。　**（１年・潮夏実）**

授業風景

比較文化学科通信 Vol.38　2024年3月19日発行
編　集：関東学院大学国際文化学部比較文化学科
編集協力：関東学院大学国際文化学部比較文化学科ゼミナール連合会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1 TEL:045(786)7056 URL:https://kokusai.kanto-gakuin.ac.jp/
印刷所：株式会社なまためプリント　〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル TEL:045 (641) 8080